

# 矢野谷古墳

—庄原地区農村基盤総合整備バイロット事業（木戸工区）  
に伴う発掘調査報告書—

1984

広島県立埋蔵文化財センター

矢野谷古墳  
-庄原地区農村基盤整備パイロット事業（木戸工区）に伴う発掘調査報告書-

正 誤 表

頁	行	誤	正
8	20	やや大きい石	やや小さい石
13	13	本古墳のあり方を	同地域の古墳のあり方を

## 例　　言

1. 本書は、昭和58年9月19日～10月21日にかけて実施した庄原地区農村基盤総合整備パイロット事業（木戸工区）にかかる矢野谷古墳、土橋上古墓の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は広島県教育委員会が得た昭和58年度国庫補助金をもって広島県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は片山和哉、伊藤実が、整理・報告書作成は片山が担当し、遺物写真は伊藤、植田千佳穂が撮影した。
4. 本書の執筆・編集は片山が行った。
5. 本遺跡の理解を深めるために、本書と同時に刊行される『懇地上組遺跡——庄原地区農村基盤総合整備パイロット事業（木戸工区）に伴う発掘調査報告書——』（財団法人広島県埋蔵文化財調査センター発行）を併読されたい。
6. 矢野谷古墳は、当初天野谷古墳と呼称していたが、矢野谷古墳として既に周知されており、大字矢野谷に所在するため、今後矢野谷古墳と統一する。
7. 本書の第1図は建設省国土地理院発行の50,000分の1（庄原）の地形図を使用したものである。

## 目　　次

I	はじめに	(1)
II	位置と周辺の遺跡	(2)
III	調査の遺跡	(4)
1.	矢野谷古墳	(4)
2.	土橋上古墓	(14)

## 図版目次

- 図版 1 a 矢野谷古墳遠景（東より）  
b 矢野谷古墳調査前近景（南東より）  
図版 2 a 矢野谷古墳調査前近景（東より）  
b 矢野谷古墳石室検出状況（西より）  
図版 3 a 矢野谷古墳完掘状況（東より）  
b 矢野谷古墳石材搬方全景（東より）  
図版 4 a 矢野谷古墳石室検出状況（南東より）  
b 矢野谷古墳遺物出土状況（南より）  
図版 5 a 土橋上古墓遠景（北より）  
b 土橋上古墓調査前近景（北西より）  
図版 6 a 土橋上古墓石積状況（南西より）  
b 土橋上古墓完掘状況（南西より）  
図版 7 a 矢野谷古墳出土鉄器  
b 伝矢野谷古墳出土土器

## 挿図目次

- 第1図 周辺地形図（1：50,000） ..... (2)  
第2図 矢野谷古墳及び土橋上古墓周辺地形図（1：10,000） ..... (3)  
第3図 矢野谷古墳地形測量図（1：200） ..... (4)  
第4図 矢野谷古墳墳丘遺存図（1：150） ..... (5)  
第5図 矢野谷古墳 2T, 3T断面図（1：60） ..... (6)  
第6図 矢野谷古墳主体部実測図（1：60） ..... (7)  
第7図 矢野谷古墳出土土器実測図（1：3） ..... (9)  
第8図 矢野谷古墳出土鉄器実測図（1：2） ..... (10)  
第9図 伝矢野谷古墳出土土器実測図（1：3） ..... (11)  
第10図 土橋上古墓周辺地形測量図（1：200） ..... (14)  
第11図 土橋上古墓実測図（1：30） ..... (15)  
第12図 土橋上古墓出土土器実測図（1：3） ..... (16)

## I はじめに

今回調査の遺跡は、庄原市木戸町大字矢野谷所在の矢野谷古墳及び庄原市木戸町大字奥木戸字土橋所在の土橋上古墓である。

庄原地区農村基盤総合整備ペイロット事業（木戸工区）に関して、広島県庄原農林事務所（以下「庄原農林」）より広島県教育委員会（以下「県教委」）あてに昭和55年10月、予定地内の文化財の有無ならびに取扱いについての協議があった。県教委ではこれをうけて予定地内の分布・試掘調査を実施し、4箇所の遺跡を確認した。この取扱いについて庄原農林と協議を重ねたが、塚田古墓を除いては現状保存できないこととなり、昭和57年9月、庄原農林より県教委へ地区外にした塚田古墓を除く矢野谷古墳、土橋上古墓、櫛地上組遺跡の3遺跡について発掘調査の依頼があった。

発掘調査は文化庁と農林省との覚え書き「農業基盤整備事業等と埋蔵文化財の保護との関係の調整について」の①の(5)項にもとづき、農政部負担分（90%）については財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「財団センター」）が、農家負担分（10%）については県教委文化課が実施することになっていたが、農家負担分は昭和58年4月1日に設立された広島県立埋蔵文化財センター（以下「県立センター」）が担当した。このため財団センターが櫛地上組遺跡を、県立センターが矢野谷古墳、土橋上古墓の調査をそれぞれ実施した。

矢野谷古墳、土橋上古墓の調査は昭和58年9月19日～10月21日にかけて実施した。

なお調査に当っては庄原市教育委員会、広島県庄原農林事務所、地元木戸町、三次市神杉町、ならびに財団法人広島県埋蔵文化財調査センターの方々、さらに地権者である梶原治宗、安藤昭伍の両氏、木戸工区長である井田節氏より多大な御協力を受けた。記して関係各位に謝意を表す次第である。

## Ⅱ 位置と周辺の遺跡

庄原市は広島県の北東部に位置し、標高400～600mのなだらかな吉備高原に刻込まれた盆地である。古くから山陽と山陰を結ぶ交通路として、また中国山地の山砂鉄を利用した鉄の生産地としても栄えてきた。

矢野谷古墳と土橋上古墓の所在する庄原市木戸町は庄原市の西端にあり、南西へ流れる国兼川の左岸の平野部及びそれに続く標高300m前後のゆるやかな丘陵からなる。この丘陵は三良坂町との境付近から北西に向って樹枝状に尾根が延びてきており、尾根の支脈の緩斜面に両遺跡は存在する。

矢野谷古墳の最高所は標高239.9mを測り、尾根の東斜面の先端部に階段状に築造された水田に囲まれて遺存する。周辺の尾根上には多くの古墳が存在している。北方には脇地上組古墳群、南西方には兵々丸古墳群、兵々丸南古墳等が存在する。いずれも小型の円墳である。また南方の銀冶屋池北岸の尾根上には全長約21mの前方後円墳と円墳1基からなる銀冶屋池古墳群が存在する。その他の遺跡として北方には脇地上組遺跡がある。この遺跡は本年度財團センターが調査を実施し、弥生時代の住居跡2軒、古墳時代と思われる住居跡1軒などを検出している。また銀冶屋池周辺は銀冶屋原という呼称が残っており、近世までたら製鉄が行われていたと言われ、現在でも鉄滓が多く散布している。



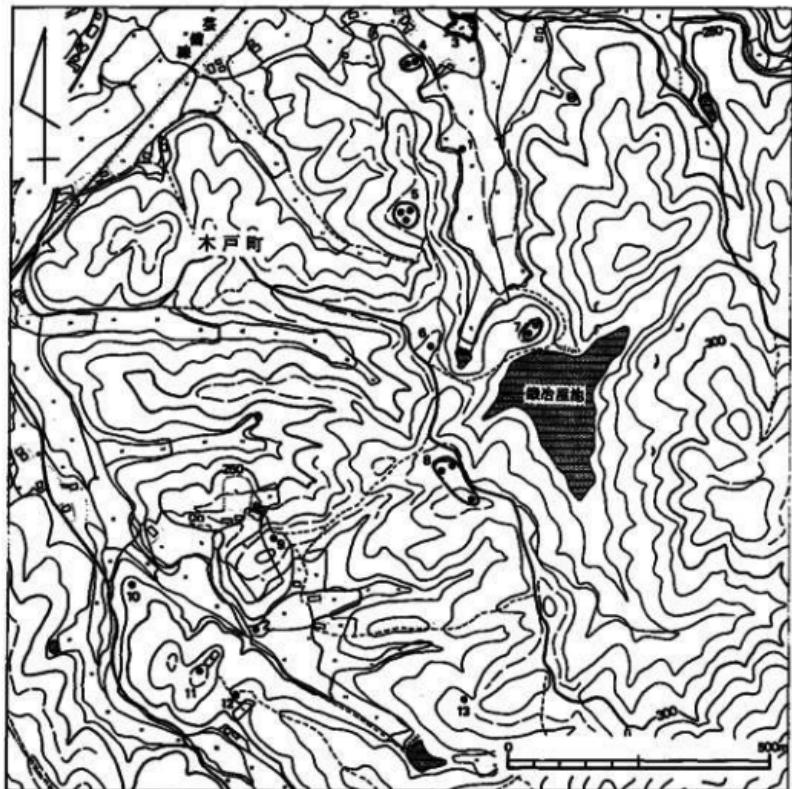
第1図 周辺地形図 (1:50,000, 庄原)

1. 矢野谷古墳 2. 土橋上古墓 3. 脇地上組遺跡

土橋上古墓は古墓頂部で標高243.5mを測り、矢野谷古墳と同じ丘陵から派生し、南西へ延びてきた尾根の南斜面の先端部の水田の中に位置する。こちらも周辺の尾根上には古墳が存在している。北方には土橋上古墳、西方には中山古墳、南西方にはかみいんどい古墳、土橋古墳、東方には定入山古墳、北東方には堂ノ奥古墳群が存在する。いずれも小型の円墳である。また南東方には奥谷

1・2号古墳が存在する。

以上が矢野谷古墳と土橋上古墳周辺に存在する主な遺跡であるが、所在が確認されているもののはほとんどが未調査で性格は明らかでない。



第2図 矢野谷古墳及び土橋上古墳周辺地形図 (1 : 10,000)

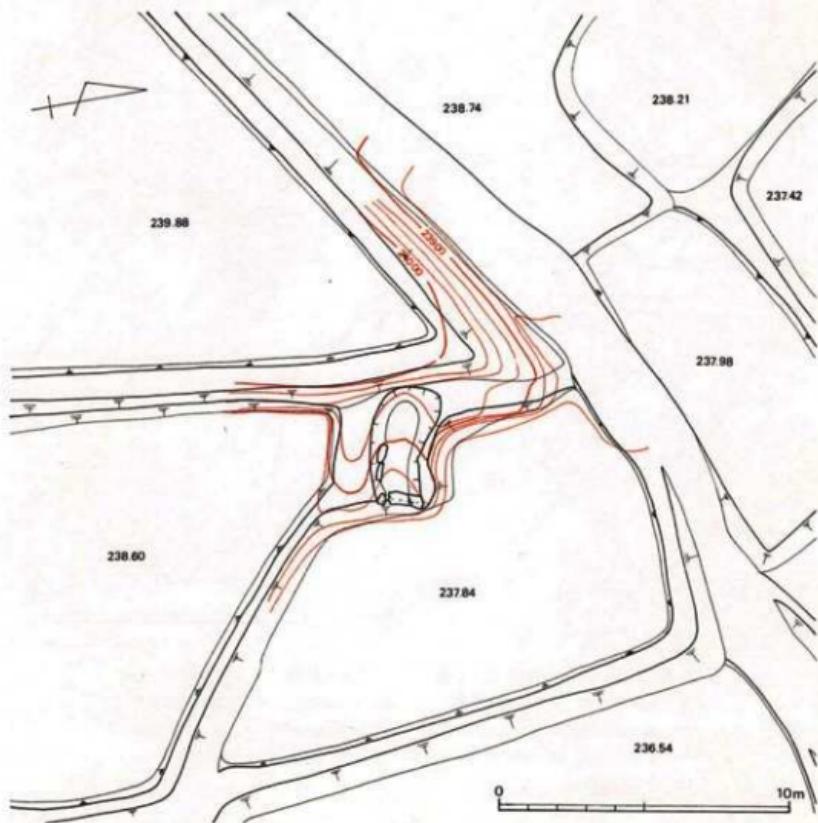
1. 矢野谷古墳
2. 土橋上古墳
3. 隣地上組遺跡
4. 隣地上組古墳群
5. 兵々丸古墳群
6. 兵々丸南古墳
7. 鎌治屋池古墳群
8. 堂ノ奥古墳群
9. 土橋上古墳
10. 中山古墳
11. かめいんどい古墳
12. 土橋古墳
13. 定入山古墳

### III 調査の遺跡

#### 1 矢野谷古墳

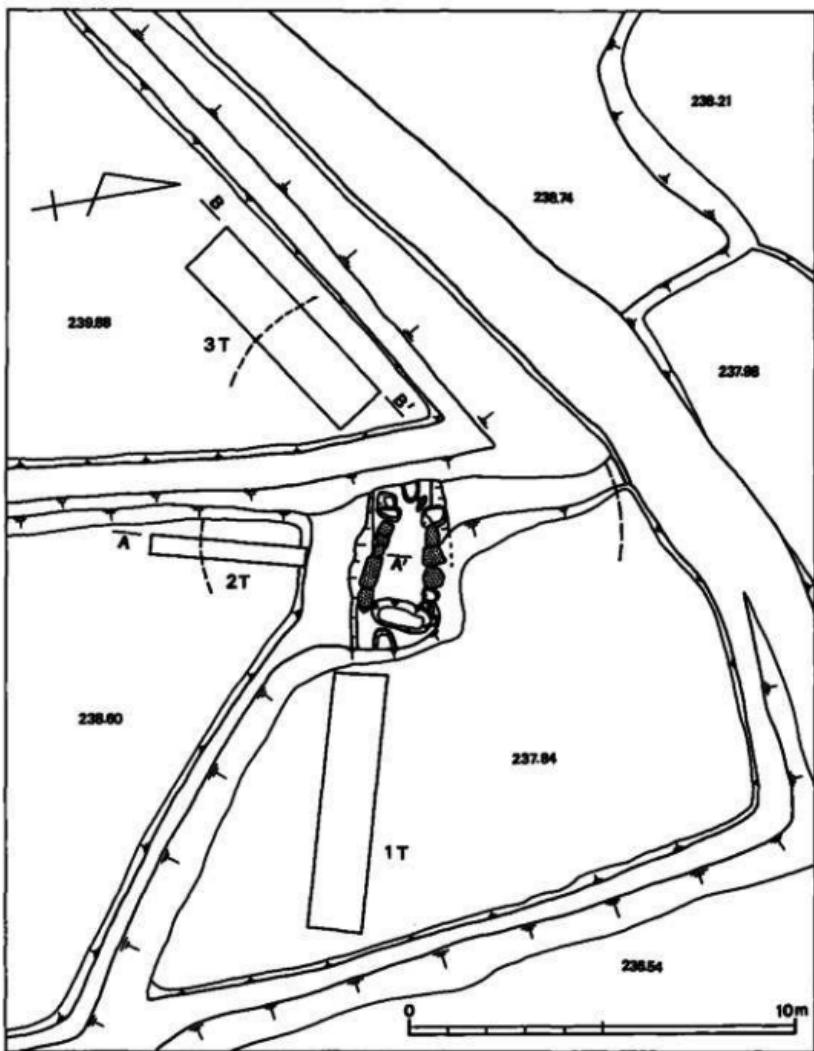
##### (1) 調査の概要 (第3・4図、図版1・2)

墳丘は残りが悪く、北半を上段の水田の畦畔として利用してあったのでかろうじて一部が残存していた。石室も石材が露出しており、中央には窪みがあった。石室は表土と地山の土の混入した覆土をあらかじめ取除いたところ、擾乱は床面まで達してい



第3図 矢野谷古墳地形測量図 (1 : 200)

た。その結果、内部主体は東へ開口する横穴式石室で側壁以外ほとんど失われていることが判明した。さらに古墳の規模、周溝の有無等を探るため南北の畦畔を断面として削り、水田にもトレーンチ3本(1~3T)を設定し、2・3Tでは墳丘の立上がりを確認した。



第4図 矢野谷古墳墳丘遺存図(1:150)(アミ目は石材)

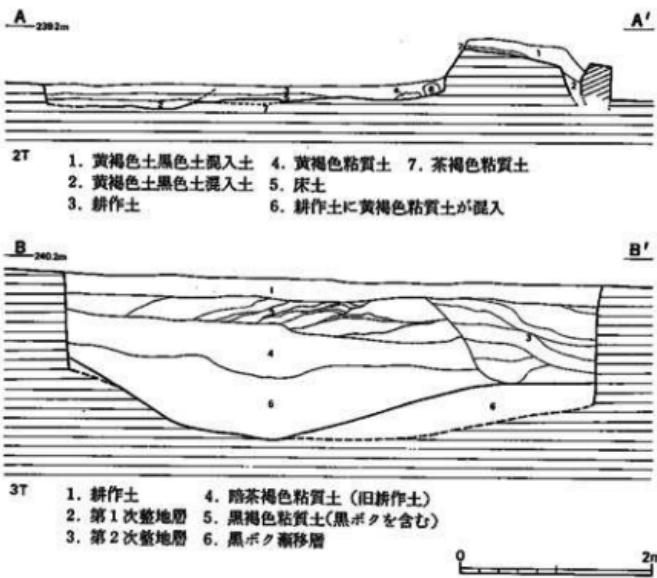
(2) 遺構(第5・6図、図版2~4)

墳丘(第5図)

古墳周辺の地山の層序は、基本的に表土層、黒ボク、黒ボク漸移層、黄褐色粘質土層である。

古墳の前方(東側)は下段の水田築造の際石室床面より約0.7m下まで削平し、背後(西側)は上段の水田の畦畔築造のため削平と埋立てを行なっている。東側の水田には1Tを入れたが墳丘の立上がり、周溝とも確認できなかった。南側の水田に入れた2Tでは水田耕作のため削平されているので不明瞭であるが、黒ボク漸移層がやや掘込まれて、石室に向って少し立上がっている。これが墳丘の立上がりと思われる。西側の水田に入れた3Tでは水田拡張のため黒褐色～黄褐色粘質土を層状にして2度埋立てて整地を行っているが、その下層の黒ボク漸移層を削平し、古墳の背面カットを施しているのを確認した。

北側は道路のため墳丘が断切られているが、道路端を墳裾と考えると、本古墳は直径約11mの円墳と推定できる。

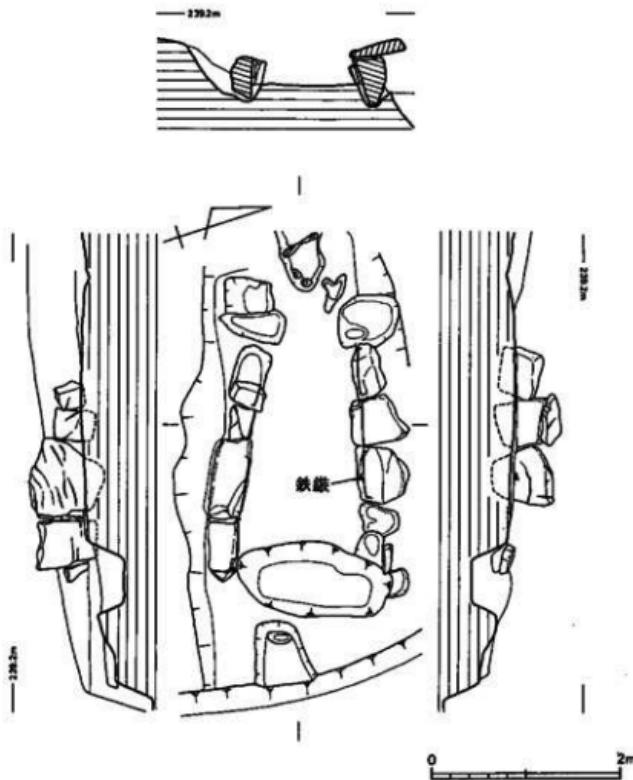


第5図 2T, 3T断面図 (1:60)

### 石室（第6図）

石室は幅約1.9m、長さ約4.2m、深さ約0.6mの掘方に組まれおり、主軸方向が磁北より105°～110°程度東に偏して開口した横穴式石室で尾根の方向よりやや振っている。現存する石室の長さは約4m、幅は奥壁部で約1m、入口部で約1.4mを測り、平面形は入口側になるほど広くなる「ハ」の字形を呈している。石材は床面から0.1～0.2m程度掘下げて据えており、羨道と玄室の区別はなかったものと思われる。

石室には天井石、奥壁ではなく、側壁最下段の腰石のみが遺存している。石室内には20～40cm程度の数個の石があったが、その中には割石整形を施したものがあり、側壁



第6図 矢野谷古墳主体部実測図 (1:60)

の石が転落したものと考えられる。

石室の奥は上段の水田の畦畔で切られており、奥壁は遺存していないが奥側の中央には不整形の掘込みがあり、奥壁の掘方になるのか畦畔築造時の擾乱によるものかはっきりしない。

南側の側壁は4枚の腰石が遺存している。奥側にはさらに3枚の石の掘方が残っており、計7枚の腰石があったと考えられる。遺存している4枚はいずれも割石の広口面を石室内部に向け、面を揃えて並べられている。入口部から2番目（以下何番目）の石が最大で広口面が台形を逆にした形であるが、他の石は長方形を縦長にして立てており石の並びは外方へ向って開いている。擾乱のためにやや内傾した4番目の石以外はほぼ直立している。北側の側壁は3枚の腰石と2番目の腰石の上に扁平な2段目の石が横積されており、さらに入口側に2枚、奥側に1枚の腰石の掘方があることから、6枚の腰石があったと考えられる。こちらも最大の1番目の石は広口面が台形をしており、他の石はほぼ正方形である。なお腰石の隙間には両側壁とも小角礫を詰めていたようである。入口部付近には長径1.5m、短径0.8m、深さ0.4m程度の梢円形の掘込みがあった。その東側には転落した $0.4 \times 0.4 \times 1.15$ mの天井石があり、割った痕跡があることから、これを抜取るために掘ったものであろう。また、天井石を取除いたところ、下に掘込みを検出した。その性格については位置的にみて後世の擾乱かもしれない。

天井石は昭和30年代に石材採取のために石を抜取ったとされ、5枚が付近の水路の橋の石材となっている。石室内に転落していたものを含めて、やや大きな石を少なくとも6枚使用していたと考えられる。

### (3) 遺物（第7～9図 図版4・7）

本古墳から出土した遺物は須恵器（杯・提瓶・甕）、土師器、鐵鎌、刀子である。須恵器はいずれも破片であるが、少なくとも杯6個体、提瓶1個体分があり、甕は4個体で内1個体は大甕になると思われる。土師器は細片のため器形は不明で、鐵鎌が7、刀子が1である。その他これまでにもかなりの遺物が出土したと言われるが、ほとんどが所在不明である。所在のはっきりしている遺物として杯蓋1、杯身1、広口壺1、提瓶1がある。

## 出土状況

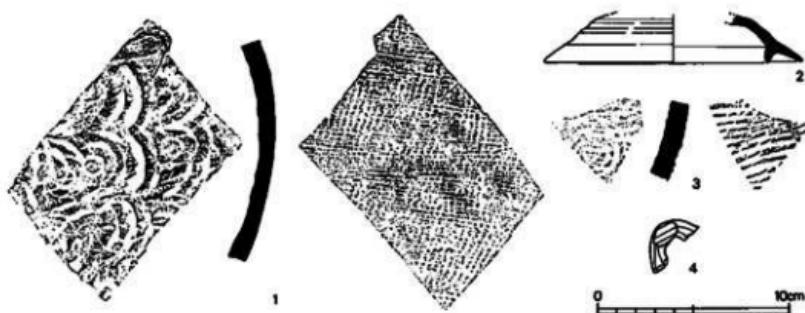
擾乱を受けた石室内埋土上層から須恵器の杯、甕の破片、土師器の細片、鉄鎌が2点、刀子が1点出土している。この鉄鎌の内の1点と床面からやや浮いた状態で出土した鉄鎌とは同一個体であった。同じ状態で提瓶の把手が出土している。ほぼ原位置を保っていると思われるものは、床面に北側壁の1番目の腰石に沿うように出土した5点の鉄鎌がある。

## 須恵器（第7図）

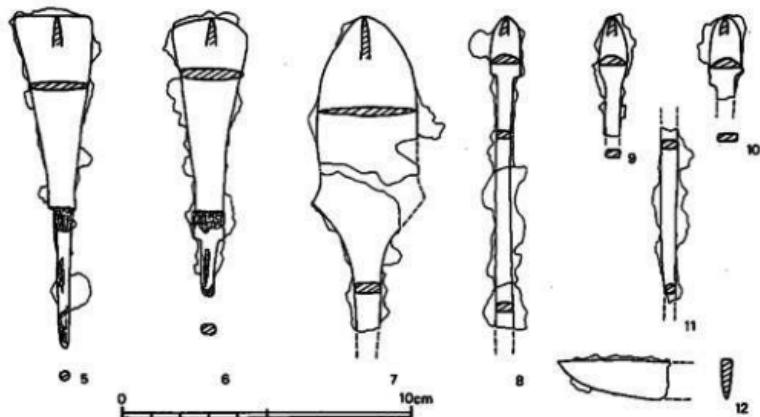
杯（2） 口径13.4cmを測り、やや扁平でかえりを持つ杯蓋で、かえりは明瞭な沈線を持つオリコミ手法で口縁端部よりわずかに長い。口縁部はやや開きぎみで、端部は丸くおさめる。マキアゲ、ミズヒキ成形で天井部の $\frac{1}{4}$ 以上回転ヘラケズリ調整を施す。なお同一個体と思われる宝珠つまみも出土している。その他の破片は細片である。

甕（1・3） 破片であるが、調整手法、焼成等の違いで4個体分がある。1は大甕になるもので体部外面が平行タタキ後ヘラ状工具でカキ目を施し、内面は同心円状タタキの後ナデによりタタキ目を部分的に消している。3は体部外面が平行タタキ目、内面が同心円状タタキ目を残す。その他、外面が平行タタキ後カキ目を施し、内面が同心円状タタキ目を残した体部の破片、外面が格子目状タタキ目、内面が同心円状タタキ目の体部の破片があり、それぞれ数点ずつ出土している。

提瓶（4） 球状になる把手で、表面には自然釉がかかり焼成の良好なものである。



第7図 矢野谷古墳出土土器実測図（1：3）



第8図 矢野谷古墳出土鉄器実測図 (1:2)

### 鉄器（第8図）

鉄鎌（5～11） いずれも有茎で平根式（5～7）と尖根式（8～11）に分けられる。

5, 6は斧箭形式で、5は現存長11.5cm, 身幅2.7cm, 6は現存長9.7cm, 身幅2.5cmで両方とも刃部から笠被に向って直線的に狭まり、刃部は平造りでやや丸味を持つ。矢柄を装着したときの木質が付着している。7は広根式で現存長10.5cm, 身幅3.5cmの大型鎌である。刃部は両丸造りでかなり扁平薄手である。8・10は柳葉三角形式で、8は現存長10.7cm, 身幅1.0cm, 10は現存長2.8cm, 身幅1.1cmである。刃部は片丸造りで笠被の断面は長方形、8は笠被が長くなっている。9は闕のない柳葉式で現存長4.1cm, 身幅1.0cm, 刀部は片丸造りである。11は刀部がないので形状は不明であるが、柳葉式か柳葉三角形式と思われる。現在長は6.0cmである。

刀子（12） 現存長3.8cm, 幅1.3cm, 刀部の先の部分しか残っていないが、銹化があまり進行していない。

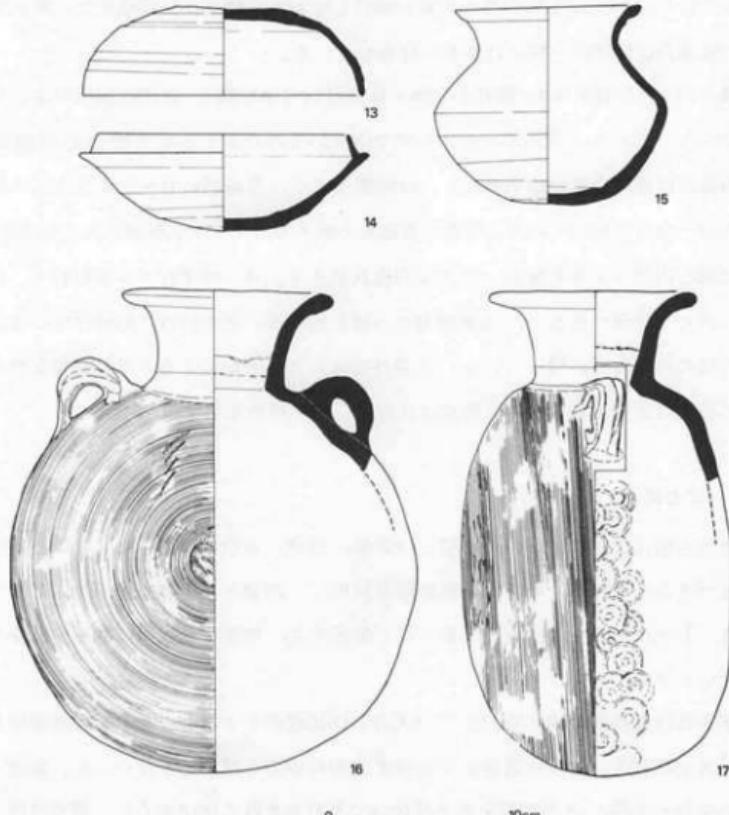
### 伝矢野谷古墳出土土器

#### 須恵器（第9図）

杯蓋（13） 口径14.6cm, 器高4.6cmを測る。平坦な天井部より内湾しながら下がり、口縁部はそのままやや開きぎみに下がる。端部は丸くおさめる。マキアゲ, ミズヒキ成形で外面は天井部から体部にかけて1/2以上回転ヘラケズリを施し、回転ナデ調

整部分との境には浅い凹線が廻っている。天井部内面には回転ナデ後仕上げナデが施されている。ロクロの回転方向は右回りである。胎土は密で1~4mm大の砂粒を含み、焼成は良好堅緻で、青灰色を呈する。

杯身(14) 口径13.0cm、受部径15.2cm、器高5.1cmを測る。やや丸味を持つ底部から外上方へ直線的に上がり、受部は外方へ0.5cmほど水平に延びて丸く終わる。立上がりは明瞭な沈線を持つオリコミ手法によるもので内上方へ1.2cm直線的に立ち、端部は丸くおさめる。マキアゲ、ミズヒキ成形で外面は底部から体部にかけて1/2以上



第9図 伝矢野谷古墳出土土器実測図(1:3)

回転ヘラケズリを施す。底部内面は回転ナデ後仕上げナデを施している。ロクロの回転方向は右回りである。胎土は密で1mm以下の細砂粒を含み、焼成は普通で、灰色を呈する。

**広口壺(15)** 口径9.6cm、器高10.2cmを測る。丸味を持つ底部からわずかに内湾しながら外上方に上がり、体部と肩部の境は外方へ張っている。肩部は直線的に内傾し口頭部に至る。口縁部は外反して立上がり、口唇部の境に明瞭な沈線を有し、端部は丸くおさめる。また口縁部にはやや焼きひずみがみられる。マキアゲ、ミズヒキ成形で外面は体部の約まで回転ヘラケズリを施し、底部内面には回転ナデ後仕上げナデを施している。胎土は1mm内外の砂粒を多含しており、焼成は良好堅緻で、灰色を呈し、口縁部及び体部の一部に自然釉が付着している。

**提瓶(16)** 口径9.5cm、器高25.3cm、体部厚14.1cmを測る。体部は前面のふくらみが少なくなっている、背面も前面よりやや少ないもののふくらんで焼台の痕跡を残す。肩部には環状の貼付把手が付く。口頭部は短く、直線的に外反して立上がり約6cmから外方へ向って開いている。体部は背面から粘土をマキアゲ、指頭圧による成形後、側方は同心円状タタキを施し、前面は円盤状粘土でふさいで平行タタキを行う。口頭部はミズヒキ成形であるが、体部側方の一部を切取り、その切口に貼付けている。体部との境には接合痕が残っている。体部外面はロクロ回転によるカキ目調整を施している。胎土は若干砂粒を含み、焼成は良好で、暗赤褐色を呈する。

#### (4) まとめ

矢野谷古墳は後世の破壊のため墳丘の規模、形状、石室の構造とも正確に把握することはできなかったが、墳丘は自然地形を利用し、西側及び南側を削平加工して墳形を整え、封土は石室を覆う程度であったと推定でき、地形を最大限に利用した小型の円墳といえよう。

内部主体は無袖式の横穴式石室で、天井石は比較的小さなものを6枚程度使用していたと考えられる。奥壁は遺存しておらず、石の掘方も確認できなかった。側壁・奥壁の石を据える際、その部分を掘下げないでそのまま置く例はあるが、側壁は掘込んで奥壁は掘込まないで石を据えるという構築法があるのか、単に搅乱のためなのか

不明である。

以上のように古墳の構造は不明確な部分が多く時期決定を行なう遺物も少ないが、伝矢野谷古墳出土遺物や1T出土遺物の杯・提瓶等の特徴から6世紀後半と思われる。第7図の2は7世紀前半の特徴を持つ。したがって古墳を構築した時期は6世紀後半に推定できるが、7世紀前半に追葬を行った可能性が強い。

被葬者については、直径11m程度の古墳の規模が周辺の古墳と比較して傑出したものではなく、矢野谷古墳の存在する丘陵及び谷の全城の支配者というよりもその中の小地域の有力者と考えられる。

本古墳から国兼川を挟んで北側の平和町の丘陵に流田山古墳群が存在し、その中の(1)流田山第2号古墳は、矢野谷古墳と同じ横穴式石室を内部主体とする。墳丘の構築法は異なるが、6世紀後半に構築され7世紀初めに追葬が行われている。ほぼ同時期、同規模であることから被葬者は同程度の勢力を有するものであったと考えられる。この地域の古墳は未調査のため不明なものが多いので、本古墳のあり方を明らかにする上で1つの資料を加えたことになるであろう。

#### 註

- (1) 広島県教育委員会「国重第1号古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財報告』  
(1) 1978年。
- (2) 広島県教育委員会、(財)広島県埋蔵文化財調査センター『西ヶ迫古墳群』1983年。

## 2 土橋上古墓 どばしかみ

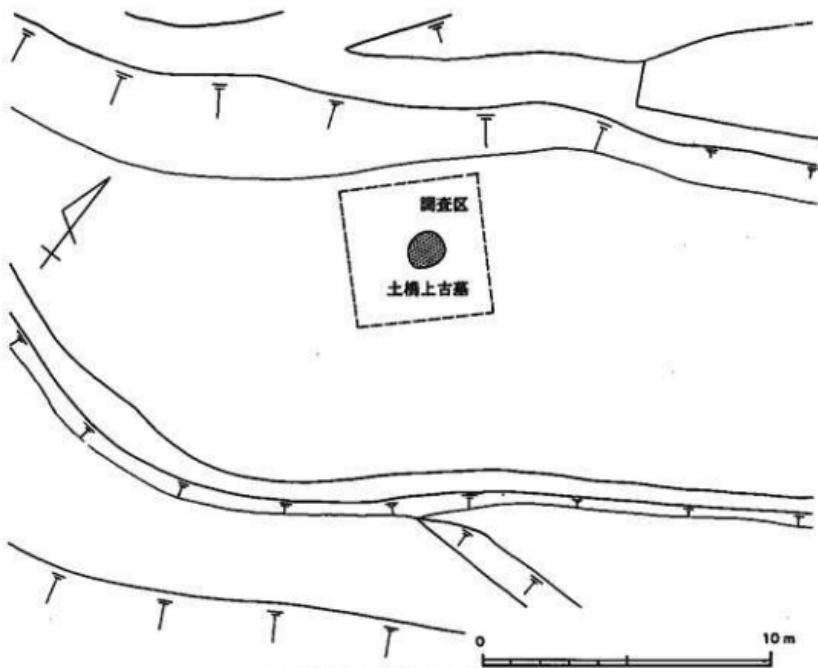
### (1) 調査の概要 (第10図、図版5)

土橋上古墓は現状では水田の中にやや盛上った石積がみられた。地元の人によると以前はかなり規模が大きかったということである。

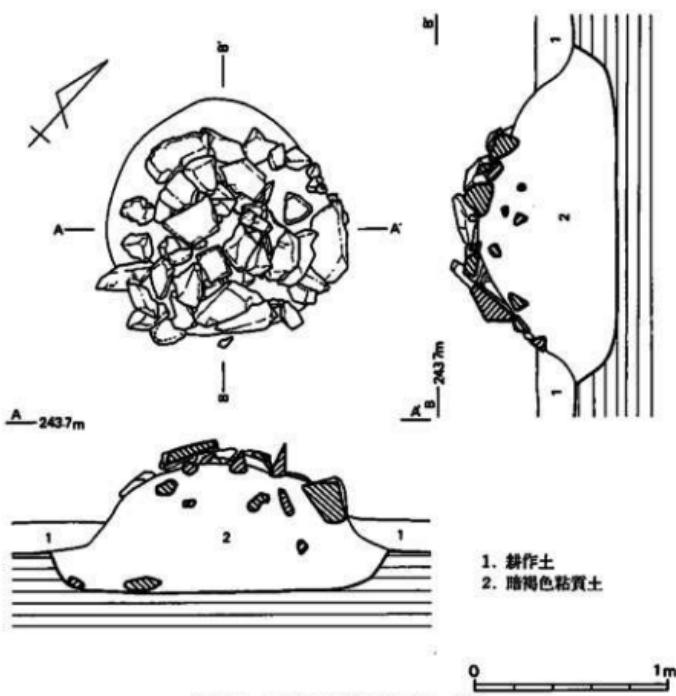
調査は古墓とその周囲5m四方を調査区として、表土剥ぎから始めた。その結果、古墓は角礫を石積したもので、頂部には榊の切株が残っていた。次いで石積の構造を探りながら石を取除き、周囲については十字の土層観察用の畔を残して掘下げた。石積の下からは土塙を検出した。

### (2) 遺構 (第11図、図版6)

古墓は現存の直径約1.3m、高さ約0.3mの円形の墳丘を持ち、その上に0.1~0.4m



第10図 土橋上古墓周辺地形測量図 (1:200)



第11図 土壇上古墓実測図 (1 : 30)

程度の角礫を積んでいる。積方には規格性はみられず、石は墳丘のほぼ全面に貼付け、さらにその上に置いてあるものもある。石を取除くと盛土は暗褐色粘質土の1層で、基壇等の施設は何もなかった。また盛土の中には5~20cm程度の角礫が數十個はいっていたが、遺物は出土しなかった。盛土をすべて取除いたところ、不明瞭ながら直径約1.3mの円形の土塙のプランを検出した。掘下げると約0.4mの深さであった。土塙は現状では黒ボク漸移層から切込でいるが、元来は水田耕作で削平されている黒ボクから切込み、直径約2mの円形になると思われる。そうすると墳丘よりも規模が大きくなるので墳丘自体も土塙プランより広範囲に存在したと考えられる。

調査区を掘下げた結果、古墓の周辺は耕作土の下に多くの角礫が散乱していた。当初この角礫は水田耕作によって破壊された下部施設かもしれないと思ったが、検出の状況からみて人為的なものとはみとめ難く、地山の石と考えるのが妥当と思われる。

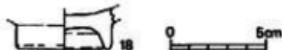
### (3) 遺物 (第12図)

墳丘の周辺部より陶器1点、土師質土器数点、鉄滓2点が出土した。(17)は土師質土器で内外面ともハケ目調整を施し、外面にはかなり煤が付着しており、鍋の底部付近の破片と思われる。

(18)は萩焼の椀の高台と思われる。



17



18

0

5cm

第12図 土橋上古墓出土土器  
実測図 (1:3)

### (4) まとめ

土橋上古墓は南斜面の先端部に地山を掘込んで、直径2.0m、深さ0.4m程度の円形の墓塚を掘り、上部には5~20cmの角礫を混ぜながら盛土を行って墳丘を造っている。墳丘は削平され、現存で直径1.3m、高さ0.3m程度であるが、元来2mをこえる規模であったと考えられる。その盛土の上に0.1~0.4m程度の角礫を貼付けている。形態としては積石塚の範疇に入るものであろう。

県内には積石塚は多いが調査例はさほど多くない。その多くが室町~戦国期に比定されているが、本古墓は墓塚及び墳丘から人骨やその他の遺物が出土しておらず、埋葬法も不明である。そのため調査例に照らすことも難しい。被葬者についても同様である。

ところで古墓の頂部には後世に植えたものと思われる樹が最近まであった。芸蕃通志には記載されてないが、信仰の対象として崇拜された時期があったと考えられる。現在でも水田築造の際に意識的に残すなど、村落において特別の場所として周知されていたようである。

図 版



a 矢野谷古墳遠景（東より）



b 矢野谷古墳調査前近景（南東より）



a 矢野谷古墳調査前近景（東より）



b 矢野谷古墳石室検出状況（西より）



■ 矢野谷古墳完掘状況（東より）



■ 矢野谷古墳掘方全景（東より）



a 矢野谷古墳石室検出状況（南東より）



b 矢野谷古墳遺物出土状況（南より）



a 土橋上古墓遠景（北より）



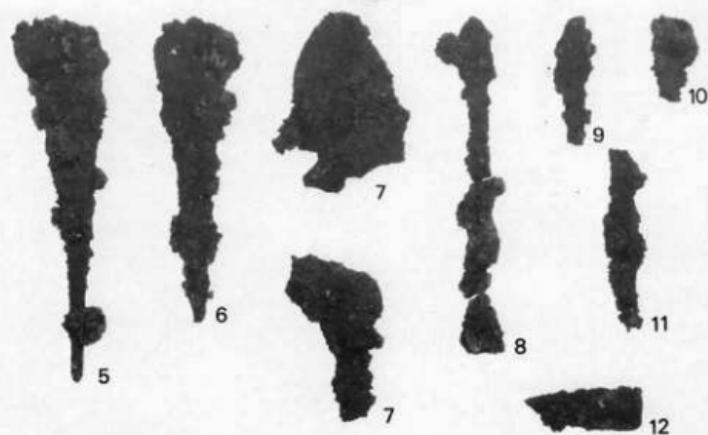
b 土橋上古墓調査前近景（北西より）



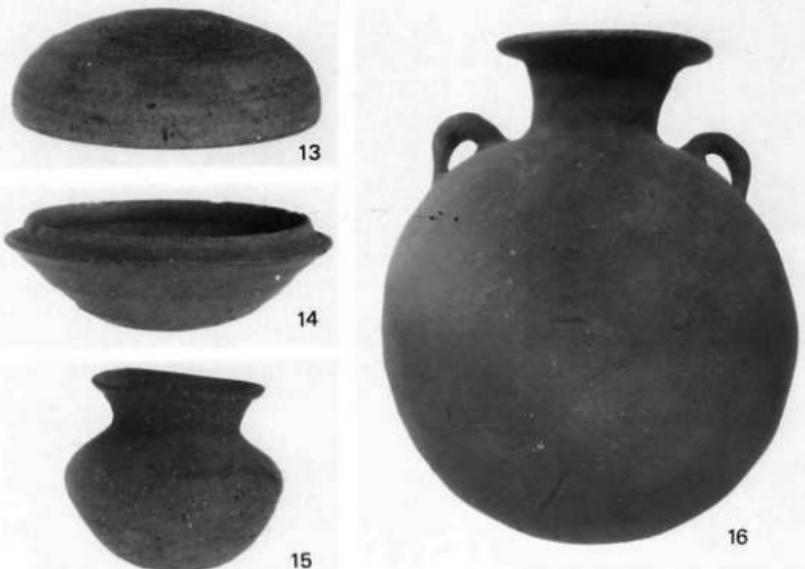
a 土橋上古墓石積状況（南西より）



b 土橋上古墓完掘状況（南西より）



a 矢野谷古墳出土鉄器



b 矢野谷古墳出土土器

## 矢野谷古墳

一庄原地区農村基盤総合整備パイロット  
事業（木戸工区）に伴う発掘調査報告書—

1984

昭和59年3月31日発行

編集 広島県立埋蔵文化財センター

広島市西区観音新町4-8-49

電話（082）295-5451

発行 広島県教育委員会

印刷 株式会社 柳盛社